

## 『反戦主義者なる事通告申し上げます』

2017年10月30日

キリスト者有志で出している冊子『時の徴』に、兩宮栄一先生が「『反戦主義者なる事通告申し上げます』反軍を唱えて消えた結核医・末永敏事」の書評を書いて、多くの人に読まれることを願うと結んでいる。早速、読んでみた。末永は埋もれた人であったが、長崎新聞の編集局長・森永玲氏が掘り起こし、思想と生涯をまとめたものである。

末永は、非戦主義者・内村鑑三から強い影響を受け、無教会のキリスト者となった結核の専門医であった。1938年（昭和13）、近衛文麿内閣は国家総動員法を施行し、勅令の職業調査を求めた。茨城県で勤務医をしていた末永は、「平素所信の自身の立場を明白に致すべきを感じ茲（ここ）に拙者（せっしゃ）が反戦主義者なる事及（および）軍務を拒絶する旨通告申し上げます」と申告した。旧内務省資料「特高月報昭和13年10月分」に、その申告文が残されている。反戦、戦争非協力を貫いた末永は、特高、憲兵からマークされ、追われ、最後は、殺されたのか、病死したのか分からず、「消えた」のである。兩宮先生は「消された」というべきであろうと書いている。森永氏は丹念に資料を集め、聞き取りをし、戦争に国民が総動員された時代との関りの中で、キリスト者として反戦思想を貫いた末永の苦闘の生涯を描き出している。

末永は、1887年（明治20）に長崎県の島原半島・北有馬村今福で医家の子どもとして生まれ、幼い頃から医者になる希望を持っていた。長崎中学校を中退し、東京の青山学院中等科に進んでいる。この頃、内村鑑三と出会い、聖書研究会に熱心に通い、内村の強い感化を受け、19歳の時、キリスト者になった。長崎に戻り、長崎医学専門学校で学び、台湾で2年ほど働き、1914年（大正3）に米国のシカゴ大学に留学する。当時、難病であった結核の研究者となり、幾多の論文を発表している。「大正期に結核の分野で国際的な仕事をしたというのは驚異的な事実。パイオニアと呼んでいい」と評価されている。10年後に帰国し、東大や京大の医学部教授たちと共同研究をしたり、交友関係を持ち、医者として働いている。1926年（大正15）に、無教会のキリスト者・中嶋静江と、内村の司式で結婚し、一女を与えられる。ところが突然、故郷の長崎に帰り、父の医院で開業した。内村は僻地伝道と呼ばれていたが、末永も師の教えに応え、故郷での農村医療と伝道を志したのではないか。いつも背広を着、外国人のような風貌であったという。

時代は戦時色を強め、治安維持法の下、共産党を手始めに、思想弾圧を強めていった。官憲による検挙者は6万8千人を超え、死者は拷問死93人、獄死128人、釈放後の病死208人、自殺25人、宗教弾圧による殺害・獄死は60人、合計514人に上る。

末永は、1938年（昭和13）に茨城県の白十字会の結核療養施設の医師となる。ここで、上記「反戦、戦争非協力」の申告をし、検挙される。取り調べで「今度の戦争は東洋平和の為であると言ふて居るが事實は侵略戦争である。戦争は御神意に反する事であるから戦争に賛成することは日本が亡びることに賛成する様なものだ」と述べたという。禁固3ヶ月の判決が言い渡されている。出所後、故郷を離れ、妻子と別れ、医師免許を剥奪され、国賊となった末永は孤独に流浪し、幼馴染であった歯科医をポロボロの姿になって訪ね、好意を受けたことまでは確かである。しかし、その後の足取りは不明で、どのように死んだのかも分からない。兩宮先生が言うように、国家権力によって「消された」のである。消されていたが、内村の非戦の信仰に従い、反戦を告白し続けた生涯が浮かび上がり、深い感銘を受けた。「帯」には、「特定秘密保護法、共謀罪の時代に問う!」と書かれているが、時を得た出版で、有効な警告書である。